

伊藤 光昌 (イトウ ミツマサ)

株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズ会長

より高度な トータル・モーション・コントロールを提供

◆2008年3月期決算の概況

常務 長井 啓

売上、利益ともに2007年11月16日付「中間決算短信」で発表した予想額を上回る結果となった。その主な要因は、下期に入ってFPD製造装置向けが予想を超えて急激に回復したことに加え、半導体製造装置向けの需要低下に歯止めが掛かったこと、また、産業用ロボット向けが比較的堅調に推移したことである。

売上高は192億12百万円となり前期比2.4%の増収となった。主な用途の需要動向は前述のとおりである。半導体製造装置向けは、夏場に需要が低下して以降、目立った回復もなく、現在も調整局面が続いている。なお、増収分のうち約3億円は、今期より連結対象となったウィンベル社の売上である。売上高総利益率は、プロダクトミックスの変化や減価償却費の増加などにより1.2ポイント悪化、また、販管費は微増となった結果、営業利益は前期比で2%の減益となった。経常利益は、ほぼ横ばいであった。これは、ドイツ関連会社にかかわる持分法投資利益が増加した一方で、昨年のような自己株式取得やコミットメントラインの組成にかかわる費用がなくなったため、営業外収支が改善したことによる。当期純利益は2.5%の減益となった。設備投資額は、ウィンベル社の工場建設や米国子会社の生産能力改善・増強を目的とした設備投資などにより増加した。

主要グループ会社の業績を見ると、ハーモニック・ドライブ・エルエルシー社（米国）については、半導体製造装置向けの需要減速により減収減益となったが、現在、米国生産工場における生産性改善を進めており、今後はその改善効果が期待できる。ハーモニック・エイディ社（長野）については、主力である遊星減速機の需要が増加し、増収増益となった。また、顧客数も増加しており拡販努力の効果が表れている。ハーモニック・ドライブ・アーゲー社（ドイツ）については、欧州市場が好況であり、特定の市場に片寄ることなく幅広い顧客に売り込んでいることから増収増益を達成した。さらに、ユーロ高も有利に作用した。

当社単体の業績については、グループ会社と同様に年度後半に需要が回復し、売上高は前年実績を上回った。営業利益については、増収効果が1億16百万円あった一方で、限界利益率の悪化により1億28百万円、製造部門の人件費や減価償却費の増加により1億57百万円、販管費の増加により36百万円の減益要因があった結果、前期比2.0%の減益となった。経常利益は、米国子会社からの配当金などがあり増益を確保できた。

資産の状況においては、流動資産の増加は主として現預金の増加によるものであり、売上債権および在庫の増加は売上の増加に伴うものである。また、固定資産の増加は主としてウィンベル社の生産能力拡張に伴う設備投資の増強によるものである。

負債・資本の状況では、流動および固定負債については特筆すべき変化はない。株主資本は当期純利益の計上により利益剰余金が増加した。自己資本比率は70.5%から73.9%に上昇している。

営業活動によるキャッシュ・フローは、税金等調整前当期純利益の減少などにより前期比1億45百万円減少した。投資活動によるキャッシュ・フローは、米国子会社およびウィンベル社への設備投資増強により支出が増加した。財務活動によるキャッシュ・フローは、自己株式の取得がなかったことなどにより、前期比で支出が大幅に減少している。

◆2009年3月期業績予想

産業用ロボット用途については、前期の年度末に向かって需要が増加傾向となった。今期についても、自動車産業のほか、デジタル機器組立用小型ロボットなども含めて比較的堅調に推移すると考えている。半導体製造装置用途については、前期第2四半期からの需要低迷の状況に底打ち感がないことから、今上期はこの状況が続くものの、下期には需要が増加に転ずるという前提に立っている。FPD製造装置用途については、前期第4四半期から急回復を遂げ、今期も投資案件は引き続き確認しているため、多少の凸凹はあるものの比較的堅調に推移すると考えている。

売上高は、前述した主要用途の需要見通しを前提として、前期比で増収を見込んでいる。営業利益について

は、単体におけるプロダクトミックスの変化や減価償却費などの増加の影響を、売上増加ならびに米国子会社における生産性改善などで吸収することにより、3億13百万円の増益を見込んでいる。営業外収支については、ドイツの持分法会社の業績が引き続き好調と予想しており、持分法投資利益の増加を見込んでいる。設備投資は、2008年3月期比でやや減少する見通しである。減価償却費は、税法の変更に伴う償却期間短縮などにより増加する見通しである。研究開発費は、メカトロニクス製品・減速機共に開発投資を上積みする予定である。

主要グループ会社の予想では、ハーモニック・ドライブ・エルエルシー社は、米国の半導体製造装置市況の回復が遅れているため、ドルベースでは大きな増収は望めないことに加え、円高による換算レートの影響により減収を予想している。ただし、前期のようなオフィス閉鎖に伴う一時的な費用が発生しないため増益を見込んでいる。ハーモニック・エイディ社は、遊星減速機が市場に浸透し需要が増えていることから増収増益を予想している。ハーモニック・ドライブ・アーゲー社については、欧州市場が引き続き堅調であることから増収増益を予想している。

当社単体の売上高は180億円を見込んでいる。上期と下期の比較では、半導体製造装置関連の需要回復とメカトロニクス製品の継続案件が結実することから、下期の売上の方が拡大する見通しである。営業利益については、増収効果により7億15百万円増、限界利益率の変化により95百万円減、製造固定費等の増加により1億70百万円減、研究開発費等の販管費の増加により1億2百万円減の増減要因を見込んでいる。これらの結果、今期の営業利益は、過去最高益となる40億80百万円を予想している。

◆より高度なトータル・モーション・コントロールを提供

会長 伊藤光昌

当社は精密制御分野の技術・技能集団であり、減速機および減速機にモーター、センサー、コントローラー、ドライバー等を組み合わせたメカトロニクス製品の開発・製造・販売により、モーションコントロールをトータルなシステムとして提供している。事業機会を拡大していくためには減速機単体だけでは満たせない価値の創造が不可欠であると考え、メカトロニクス製品の高精度化、軽量化、特殊形状化に注力し、より高度なトータル・モーション・コントロールの提供を進めていく。

◆中期経営計画（3カ年）最終年度の戦略

売上高について、初年度の2006年度は、計画170億円に対して実績187億円となり、2年目の2007年度は、計画190億円に対して実績192億円となった。最終年度である2008年度は、計画215億円に対して実績200億円程度で軟着陸するだろうと予想している。現状は半導体製造装置関係の市場の悪化により多少停滞気味であるが、メカトロニクス製品の新品開発と市場投入をいかに能動的に行っていくかによって、計画と実績の差が縮まっていくと考えている。

メカトロニクス事業の基盤を強化するために次の点に取り組んでいく。

①ウィンベル社との関係強化

昨年、優れたモーター技術を持つウィンベル社と資本・技術提携をしたことで、同社とのモーター開発業務に関する受委託関係を強化し、また共同で開発しながら育てていくことを考えている。2008年2月にモーター製造工場を建設したことで、この工場を最大限に活用し、モーター事業をどのように発展させていくかが今後の課題であるが、技術的問い合わせは非常に増えているため今後が楽しみである。

②技術営業の強化

主にメカトロニクス製品の提案力や課題解決力の向上を図るため、営業部門への技術者の投入を進めている。現在、当社の営業スタッフ33名のうち11名が設計・開発に従事してきた技術者である。これによって、できる限り早い段階に顧客のニーズをキャッチし、引き合いから受注までのプロセスを短期化していく。そして、保有するコア技術を高度に融合することにより、高付加価値製品の提供を加速し、メカトロニクス事業を成長させていく。

(平成20年5月19日・東京)